

新たな始まり

Vol.36

親鸞聖人750回大遠忌

宗門長期振興計画の現状

仏教讃歌の新曲と新編曲について

宗門長期振興計画の重点項目④「伝道態勢の整備」のうち、**教道研究センター**（本願寺仏教音楽・儀礼研究所）で取り組んでいる、**仏教讃歌の新曲制作と既存曲の新編曲**について紹介いたします。

1 現代の仏教文化として

仏教讃歌は、明治時代に生まれた、新しい仏教文化のひとつです。

仏教あるいは浄土真宗の歴史、そしてそれらのなかで育まれた声はぐく、明や雅楽ががくなどの仏教音楽の歴史に比すれば、仏教讃歌のそれは、わずかに百年ほどの短いものでしかありません。しかし、現代におけるその隆盛——特に私たちの宗門において——は、仏教文化として特筆すべきものがあります。

本願寺仏教音楽・儀礼研究所では、仏

2 歌の不易※ふえきと流行①

——求められる新しい讃歌

歌は世につれ、世は歌につれ——と言われるように、好まれる音楽の種類には、流行り廃りはやたがあります。

親鸞聖人は、当時の流行歌であった今様の節で、人々が口ずさむことを念頭に、ご和讃を執筆されたといわれています。



2010年度奉讃演奏会での新曲発表

広くみ教えを伝えることが、仏教讃歌の役割の一つであると考えらるならば、仏教讃歌にも、それぞれの時代にあつたスタイルが求められるでしょう。

特に、情報流通のスピードが速い現代では、流行りのスタイルもめまぐるしく変化しています。それだけに、新しいスタイルによる作品の創作は、仏教讃歌に対する取り組みにおいて、常に考えておかねばならない点のひとつです。

3 歌の不易と流行②

— 世代を超える讃歌

また同時に、研究所では、世代を超えて一緒に歌われる仏教讃歌の大切さにも、着目しています。

例えば、私たちの宗門の場合、法要や行事の際に歌われる《恩徳讃》おんじやくさんや《真宗宗歌》、愛唱歌として親しまれている《旅ゆくしんらん》や《聖夜》などが挙げられるでしょう。

一般の社会でいえば、それらの作品は、校歌や社歌など、いわゆる「共同体の歌」にあたります。例えば校歌の主たる目的は、生徒が各種の学校行事で歌うことで、その学校の生徒であるという意識を養やしなうことにほかなりません。このように、共同体の歌には、人々の帰属意識を高めるといふ働きもあるのです。

先に挙げた《恩徳讃》や《真宗宗歌》は、この意味で、一所に集うものが、世代を超えて一緒に口ずさめる讃歌とな

親鸞聖人750回大遠忌 宗門長期振興計画

【基本的な考え方（コンセプト）】

- 『新たな始まり』
～明日の宗門の基盤作り～

【目標】

- 親鸞聖人750回大遠忌法要の修行
- 現代社会に伝える教学・伝道態勢の構築とみ教えに生きる「人」の育成

【重点項目】

- ①法要の修行
- ②記念行事等の推進
- ③協賛行事
- ④**伝道態勢の整備**
- ⑤時代に即応する教学の振興
- ⑥新たな門徒の誕生（教線の拡充）
- ⑦国際伝道の推進
- ⑧寺院の活性化対策
- ⑨過疎・過密対策
- ⑩地域社会との交流
- ⑪現代社会への貢献
- ⑫人材育成の新規対策
- ⑬既存の人材育成施策の強化
- ⑭宗務機能の点検と拡充
- ⑮境内地等の整備

つています。まさに、親鸞聖人のみ教えをいただいた仲間、あるいは浄土真宗の御同朋おんどうぼうという自覚を促うながしてくれる「サンガの歌」なのです。

4 歌の不易と流行 ③

——心に刻まれたメロデー——

そして、共同体の歌がもたらす効果としては、人がその共同体から一旦離れた

後のことも考えておく必要があります。

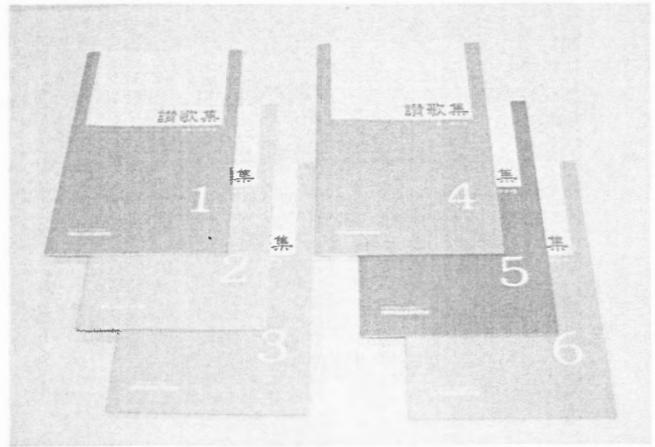
例えば、卒業後に行われる同窓会においては、校歌をみんなで歌うことによつて、場が一層の盛り上がりを見せます。

これは、校歌というアイテムが、一緒に歌う者同士「仲間である」と改めて意識させてくれる、つまりその場が「自分の居場所」であることを認識させてくれるからにはかなりません。

これを仏教讃歌のケースにあてはめて

みると——例えば、お寺から少し離れた生活を送っている時に、何らかの縁で、久しぶりにお寺に足を運ぶことがあったとしましょう。その時、幼き日にお寺の日曜学校や幼稚園で歌った曲、あるいは両親や祖父母に連れられてお寺にお参りした時に聴いていた曲を耳にすると、懐かしさと同時にちよつとした安堵あんどを覚える方は、決して少なくないはずです。

メロデーとは、その時々々に人の感情



『讚歌集 二部合唱』(既刊分6巻)

を揺り動かすだけでなく、さまざまな思い出とともに人の心に刻まれるものもあるのです。それだけに、時代を超えてメロディーを受け継いでいくこともまた、大切なことなのです。

5 具体的な取り組み

このような音楽のもつさまざまな性質

に鑑み、研究所では、新曲の制作と既存曲の新編曲という両面から、仏教讃歌に取り組んでいます。

新作としては、親鸞聖人のご和讃を歌詞として、二〇〇七年に発表した《相好ごとに百千の》(作曲・石若雅弥)や《阿弥陀仏の御名をき、》(作曲・平野一郎)をはじめ、仏教讃歌を必要とする関連機関と連携の上、今年度までに十数点の作品を制作・発表してきました。写真は、本年度の奉讃演奏会(一月十五日、開法会館)で、《あなたと出逢って》(作詞作曲・江崎とし子)や《草ぶえふいていこう》(作詞・中川正文/作曲・松園洋二)が発表された時の模様です。

また新編曲の多くは、既存曲とはいえ、時代に沿ったものとして手を加える必要が生じたことに拠っています。現在の私たちの宗門では、特に仏教婦人会を中心に、二部合唱での演奏活動や大正琴での演奏が大きな割合を占めています。こうした状況に鑑み、研究所では、それらに向けた既存作品の編曲にも取り組んでいます。

ます。

* * *

なお、これらの作品に関しては、すでにその一部が『讚歌集 二部合唱』(全十巻、第六巻まで既刊)や大正琴のピースとして、出版されています。さらに二〇一一年(平成二十三)年度に刊行予定の楽譜集にも収録の予定です。各種の活動に、仏教讃歌を活かしていただければ幸いです。

(教学伝道研究センター)

※「不易」とは、俳人・松尾芭蕉の生み出した概念「不易流行」から生まれた言葉で、芸術や文化等において、不変の真理や精神を意味する。転じて現在では、時代や環境によっても「変わらないもの」の意で用いられる。